玉川教会たより

NO. 491
2017年3月19日
町田市玉川学園4－5－32
TEL. 042－732－9321
FAX. 042－732－9337
Eメール　chiyosi514@yahoo.co.jp

『草は枯れ、花は散るとも』

Ⅰペトロ1：22～25

▼半世紀も昔のことになります。教会に通い初めて間もない頃、一組の男女の結婚パーティーに招かれました。パーティーと言いましても、出席者は10人居なかったと思います。あまりに寂しいパーティーだから、員数合わせに誘われたのかも知れません。

新郎は、仕事の関係で、一年中殆どが山奥の現場で暮らし、月に1～2回、里に下りて来るという生活でした。新婦は、子どもの頃から心臓を患い、日常の生活にも支障があります。自宅から教会までの道のり、普通の人の足なら20分もあれば充分な所を、彼女は、休み休み、1時間以上もかけてやって来ます。

この二人が、互いに愛し合い、結婚したいという話になりました。きっかけは、男性の方に縁談があったからです。好人物ですから、教会の役員をしている町の有力者から話が起こりました。それを牧師が仲介して、話を進めようとしたら、実は結婚したい人がいるとなった訳です。

周囲の者は、こぞって大反対。何しろ、50年近い昔、田舎のことですから、まだまだ、固陋な結婚観が強かったのです。

健康な男女が結婚して、少なくとも2人3人の子どもを生み、育てる、それが結婚だという結婚観が当たり前でした。

▼青年は、まだ大学生にもなっていない私を相手に、「結婚とはそういうことだけではないだろう」。「愛とは、計算や打算とは無縁なことだろう」と、熱っぽく語ります。「奥さんに家事をして貰わなくても、ご飯くらい自分でも作れる。今までだって自分のことは自分でしてきた、それで良いだろう。子どもが出来なくたってかまわない。そういうことは、神さまの御心のままだ。子どもがなくとも幸せな夫婦はいくらでもいるじゃないか」。

「自分は彼女の信仰に、信仰による生き方そのものに惹かれている。一緒に祈ることが出来れば、他のことはどうにかなる」。そんな話をタップリと聞かされました。

▼二人の結婚は、牧師からも反対され、教会からも祝福されなかったのですが、しかし、数年後、何と、この夫婦に子どもが与えられました。母体は大丈夫かと、誰もが心配したのですが、立派な女の子が生まれ、奥さんも、むしろ以前より健康になりました。

その子どもには、恵と名前が付けられました。神さまの恵です。いろいろと不自由なことの多い結婚生活だろうと想像致します。経済的には決して豊かではなかったかと思います。しかし、この二人に神さまからの恵が与えられたことは、間違いありません。それは、真に、信仰によって生きる者に下される恵なのです。

▼そしてこの出来事が、私が神学校に進む決断材料の一つとなりました。世の中に、本当に、銭金打算ではなく、信仰に生きる人がいるということ、信仰に生きることが出来るのだと教えられたのです。